

二〇二二年度

二月一日午前入試(第一回)

国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、1-1 から 1-14 まであります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

主人公の「ぼく(塚原輝)」は、運動会で保護者といっしょに走る「二人三脚競走」に今年は叔父の「樹おじさん」と参加することになっていた。「ぼく」は毎年「おじいちゃん」といっしょに走っていたが、昨年、競技の最後に「おじいちゃん」がけがをしたため、今年は心配した「おばあちゃん」が「おじいちゃん」に参加をしないようにと言っていた。「ぼく」は小学校入学前に父親を亡くしており、同じクラスの「田村香帆」も一年前に災害事故で父親を亡くしている。「香帆」は今まで二人三脚競走に出たことはなかったが、今年は母親と参加することになっていた。

午後は応援合戦からスタートして、そのあとに来年入学する未就学児が参加するリレー。その次が(保護者参加の二人三脚競走)だ。

お弁当を食べおわるころには、校庭には再び保護者の姿が戻ってきていた。

ぼくは三階の教室から校庭をながめた。

正門から少しはなれたところで、香帆がうろうろしているのが見えた。後ろ姿だけど、ぼくにはすぐわかるんだ。

なにしてるんだらう。

教室を出て、香帆のところへいった。

「なにしてんの?」

「あつ、塚原くん。」

ふり向いた香帆は、不安げな顔でぼくを見た。

「どうしたの?」

「お母さんが、こないかもしれない。」

「えっ。」

聞けば、香帆のお母さんは今日休みを取っていたが、今朝、急ぎよ欠勤になったスタッフのかわりに、病院に呼び出されて出勤してしまったのだという。

「午前だけ仕事して、午後は運動会に間に合うようにするって言ってただけど。」

「そんなことできるの?」

①「知らない、でもそう言ったんだもん。」

ぼくは香帆のお母さんを見たことはないけど、香帆といっしょに正門から入ってくる人の波を目で追った。

そのときだ。正門から入ってきた水色のシャツにぼくはぎよっとした。

「あっ。」

「えっ。」

ぼくの驚いた声に、香帆もつられて声をあげた。

「あら、輝。なにしてんの?」

お母さんだった。後ろには、おじいちゃんたちもいる。

「いや、別に。」

お母さんの目が「あら、女の子といっしょ？」と好奇心こうきしんでうったえてくる。でも、今はそれどころじゃない。

「輝ひかる、こっちは準備万端ばんたんだ。いつでも走れるぞ。」

樹おじさんがぴしっと親指を立てる。ぼくはとなりの香帆かほを見た。香帆はその顔が見えないくらいにうつむいてしまっている。

校庭に、午後のプログラム開始のアナウンスがかかった。

「あたし、もういく。」

やっと聞こえるくらいの声で香帆は言う、そのまま走って行ってしまった。

「大丈夫？」

お母さんが心配げに聞いてくる。

「うん、たぶん。わかんないけど、大丈夫。」

あいまいに返事をして、ぼくはみんなに手をふった。

午後のプログラムがはじまった。

赤組と白組の応援団おうえんが、それぞれ応援合戦を披露ひろうする。

ぼくたち一組は赤組だ。

応援団の声かけに合わせて、みんなで「おー。」と秋晴れの空へこぶしをつき出す。

練習のときから、みんなと声を合わせる瞬間しゅんかんはとても気持ちよかった。それでも、今のぼくはななめ後ろにいる香帆のことが気になってしまう。

香帆のお父さんに、二人が走っているところを見てもらいたい。ぼくは空を見あげて思った。

応援合戦がおわり、次のプログラムがはじまる。それと同時に〈保護者参加にんさんきやうの二人三脚競走〉に参加する生徒と保護者は、入場場所前に集合するようアナウンスがかかった。

「香帆ちゃん、いこう。」

菜摘なつまが香帆に声をかけている。

ぼくたちのクラスから参加するのは男子が七人、女子は香帆と菜摘だけだ。

「お父さん、こっちこっち。」

背が高くてひよろりとした男の人が、菜摘のもとへ歩いていく。去年も見たことがある菜摘のお父さんだ。

① ぼくは樹おじさんを探した。樹おじさんが手をふってこちらへ歩いてくる。おじいちゃんもいっしょだ。

② 「息子むすこと孫の初共演だから、見送ろうと思っただけ。」

「おじいちゃん、ありがと。」

③ 「さあ、いよいよだな。やっぱり緊張きんちやうするな。でも心配するな。おれたちは大丈夫さ。練習の成果を見せてやろう。」

緊張している樹おじさんには悪いけど、今は自分のことより香帆のことが心配だ。

ぼくは香帆を探した。無事にお母さんと合流できただろうか。

「えー、お母さん、きてないの？」

菜摘の声がして、ぼくはふり返った。

「おじさん、ここで待ってて。」

ぼくは香帆と菜摘のもとへかけよった。

④ 「田村たむら、やっぱりお母さんきてないの？」

「そうなんだって。」

うつむいている香帆のかわりに菜摘が言った。

「なになに、どうしたんだよ？」

「大丈夫か？」

智博と祐希も、何事かと近づいてきた。

「香帆ちゃんのお母さん、まだきてないんだって。」

菜摘が言った。

「えー、まじかよ。じゃあ、出れないじゃん。」

智博の声はあつけらかんとしている。

香帆が A くちびるをかんだのが見えた。

「なんできてないの？」

祐希が聞いてくる。香帆がなにも言わないので、ぼくが口を開いた。

「急に仕事になったんだって。でも、午後はなんとかして運動会にくるって話だったんだけど。」

「それはむりだよ。午後からぬけ出せるわけないよ。だって、看護師はつねに人が足りないってうちのお母さん言ってたぜ。」

母親が同じ病院で働いている祐希が言うのだから、そうなのだろう。

でも、そんな言い方をしたら、まるで香帆のお母さんが、最初からできない約束をしたみたいじゃないか。

「もいい。」

B 顔をあげて、香帆が言った。さつきまで不安でゆれていた瞳が、今は怒りでゆれている。お母さんのことを、怒ってるんだ。

「あたし出ないから、もいいい。」

その場をはなれようとする香帆の腕を、菜摘がそとつかんだ。

「でも、せっかく楽しみにしてたのに。」

「そっだよ。ギリギリまで待ってみよう。」

ぼくも言った。

だって、今日は香帆とお母さんの大事な日だ。二人で新しいスタートをきる日なんだろう？

無言で香帆にうったえる。香帆の瞳には、まだ怒りの色がゆれていたが、

「わかった、待ってみる……。」

うなずいてくれた。

こっちに向かってくる女の人がいないだろうか。みんなであたりに目を配った。

「生徒と保護者のみなさーん。整列してください。」

ああ、三木先生が呼んでる。もう、これまでだ。香帆を囲んでいたぼくたちのあいだに、あきらめの空気がたがたよう。

「おい、輝。大丈夫か？ どうしたんだ？」

樹おじさんとおじいちゃんが近づいてくる。

香帆が顔をあげて言った。

「あたし、もういくね。みんながんばって。」

いや、だめだ。香帆もぼくたちといっしょに走らなきゃいけない。

「待って。」

⑥ ぼくは香帆を呼びとめた。

「田村はうちのおじさんと走って。」

みんなが「え？」と声をそろえた。

「おじさん、田村と走れるよね？」

「え、え、えっ？」

樹おじさんが目を丸くして驚いている。

「でも、塚原くんはどうするの？」

とまどいながら香帆が言う。

「ぼくはいいんだ。とにかく、田村はうちのおじさんと走りなよ。」

「でも、おれがこの子と走っちゃってもいいのか？ いちおう、保護者と走る競技なんだろう？」
すると、智博が言った。

「いいじゃん。田村は輝のおじさんと走っちゃえよ。だれが保護者かなんて、ばれやしないって。なっ？」

智博の明るい声につられて、

「うん、そうだよ。」

「せっかくだから、走る。」

祐希と菜摘もいっしょにうなずいた。智博はにかつと笑って香帆を見た。それでも、香帆はまだ困った顔だ。

ぼくは列をさばいている三木先生に向かって声をはりあげた。

「三木せんせい。保護者って、とくに決まりはないってことでもいいんですよねー？」

「うん、ないない。ていうかー、君たちなにしてんのー、早くこっちにきなさい。」

「ほらね。保護者はなんでもありだつて。」

⑦ ぼくは香帆に自信満々で言ったが、香帆の顔はまだ晴れない。ぼくのことを心配してくれているんだろうけど、早く整列しないと、三木先生は生徒も保護者も関係なく声をはりあげてしまいうさうだ。

「でも、そしたら。塚原くんがあたしのせいで走れなくなっちゃう。」

「ぼくは大丈夫。」

後ろで、きらん、と目を光らせている人がいる。

「おじいちゃんと走るから。」

三木先生からたすきを受け取って、ぼくは自分の右足とおじいちゃんの左足をしっかり結んだ。

「おじいちゃん、きつくない？」

「ん、大丈夫。いい感じだ。」

ぼくは体を折り曲げて、右どなりにいる香帆と樹おじさんの様子をうかがった。

香帆も、ぼくと同じ左側に立っている。

「おじさん、スタートの合図が鳴ったら、結んでる足から出すんだよ。そのあとは、いっちに、いっちに。このリズムを忘れないでよ。ちゃんと田村のペースに合わせてよ。」

「わかってるって。それより、自分たちの心配をしろよっ。」

からかうように樹おじさんは言った。香帆が樹おじさんを見あげる。

「あの、腕うでにつかまってもいいですか？ お母さんと練習したときも、腕につかまってたから。」

香帆かほのかわいいお願いに、樹いっさおじさんのまゆげがへによりとさがった。なんだよ、その顔。樹おじさんに、ついやきもちを妬やきそうになった。

ぼくたちは、一直線にならんで順番を待った。

三年生がスタートして、少し前に進み出る。

智博ともひろも、祐希ゆうきも菜摘なつみも、みんなお父さんとくつついて準備万端ばんたんだ。

四年生がスタートして、ぼくたち五年生はスタートラインに立った。

ぼくはおじいちゃんの腰こしに腕をまわした。

樹おじさんよりもがっしりしたおじいちゃんの腰は、安定感がバツグンだ。おじいちゃんの手がぼくの肩をつかむと、一年ぶりとは思えないほどびったりだった。

「おじいちゃん。ぜったいにむりはしないでね。」

かっこ悪い走りはしたくないとか、そんなことはもうどうでもいいんだ。

C

それだけでいい。

返事のかわりに、おじいちゃんの手がこもった。

四年生がゴールにすいこまれていく。いよいよだ。

スタートラインのギリギリ手前につま先をつける。

胸がドキドキする。きつと、少しはなれたところにいる香帆も同じだ。

がんばれ。

「よーい。」

三木先生みきが声をあげる。

パンツ。

ぼくたちはいっせいにスタートした。

「いっちに、いっちに、いっちに、いっちに。」

ぼくはおじいちゃんに聞こえるように、声に出しながら足を動かした。

「いっちに、いっちに、いっちに、いっちに。」

最初の三十メートルくらいは、ほぼ全員が横ならびだったけど、だんだん、スピードに差が出てくる。ぼくたちの前をいく背中が、どんどん増えていく。

左どなりにいた智博と祐希たちは、もうとっくにぼくたちの前を走っている。

ぼくとおじいちゃんは、どんだんはなされていく。

すいっと、樹おじさんと香帆のチームがぬき出るのがわかった。

香帆の右手が、樹おじさんの腕をしっかりとつかんでいる。

ああ、よかった。^⑧香帆がちゃんと走ってる。

ぼくはおじいちゃんの腰をつかむ手に力をこめた。

赤いコーンの目印が目に入った。ここからちようど、残り五十メートルだ。去年、おじいちゃんが倒れそうになったところだ。

「おじいちゃん、あと半分だよ。」

ぼくたちのスピードはさらに落ちていく。

「ゆっくりで、いいよっ。」

ゆっくり、ゆっくり。それでも、確実に足を前に出す。

気がつけば、校庭で走っているのはぼくとおじいちゃんだけになった。去年といっしょ。ぼくたちだけで、校庭をひとりじめだ。

ゴールが近づいてくる。

ゴールの目の前では、応援おうえんしている人たちが歓声かんせいをあげて待っている。

水色のシャツが目飛びこんできた。お母さんだ。両手をぶんぶんふって、その目はぼくのことをまっすぐ見ている。

お母さんの横には、おばあちゃんがいた。ぼくたちの姿を見たおばあちゃんが、大きく口を開けて驚おどろくのが見えた。

やばい。

おばあちゃんのことを忘れていた。勝手におじいちゃんを競技に出してしまった。

あとでおじいちゃんといっしょに怒おこられよう。

そう覚悟かくごを決めて、ぼくたちは歓声のわくゴールに飛びこんだ。

夕日が落ちて、だれもない校庭はうつすらオレンジ色だ。

ほんの一時前まで、ここで走ったり声をあげたりしていたのに、今はぐちゃぐちゃになった白線が、ところどころ残っているだけだ。

「ほんとにありがとうございます。」

香帆かほのお母さんが、樹いっきおじさんに頭をさげている。

「いやいや、そんな。ぼくこそ、香帆ちゃんと走れて楽しかったです。」

香帆のお母さんは、閉会式がおわるころによく到着とうちゃくした。

体調の悪い患者かんじやさんがいて、状況じょうきょうが落ちつくまで病院を出ることができなかったのだという。

「大変ですよ、病院でのお仕事って。」

お母さんが言うと、香帆のお母さんは「ええ。」と複雑な表情でうなずいた。

「せっかく練習したのに、結局いっしょに走れなくて。」

香帆のお母さんは、手をつないでいる香帆に目をやった。

ぼくたちは、正門の前で立ち話をしていた。

お母さんと、樹おじさんと香帆のお母さん。

おじいちゃんたちは、ひと足先に帰ってしまった。久しぶりに走ったおじいちゃんも、妊婦にんぶさんである莉子りこおばさんも、さすがにつかれてしまったようだ。

「あんなに楽しみにしていたのに、いっしょに走れなくてごめんね。」

つないだ手をゆらしながら香帆のお母さんが声をかけると、香帆はくしゃりと顔をゆがませた。その目から、もうがまんできかないとばかりに涙なみだがこぼれる。

「お、おい。泣くなって。また来年、お母さんと走ればいいじゃん。」

おろおろして、ぼくは言った。

「違ちがうの。」

声こゑがふるえている。

⑨ 「うれしいの。」

香帆の言葉に、ぼくはさらに困惑こんわくしてしまう。

「うれしくて涙が出るの。みんなが……心配してくれて、やさしいから。塚原くんが、おじさんと走れって言うてくれて……おじさんがいっしょに走ってくれたから、すごくうれしいの。」

香帆のお母さんは、つないでいないほうの手をのばすと、香帆のほおをすべり落ちていく涙をぬぐった。「ほらほら、もう泣かない。」

そう言って笑う香帆のお母さんの横顔は、香帆にとてもよく似ている。

正門を出て、香帆たちと別れた。

香帆のお母さんは最後までぼくたちに頭をさげながら歩いていった。

もし香帆のお母さんが競技に出ていたら、おそらくビリだったかもしれないな。そう思うほど、綿菓子のようにふわりとやさしい感じの人だった。

「じゃあ、おれも帰るな。今日はおつかれさん。」

樹おじさんはいつものように、手のひらをぼくに向けてくる。

「うん。」

ぼくは思いきり、樹おじさんの手を打った。

^⑩「今日の輝、かっこよかったぞ。」

そう言って、樹おじさんは手をふった。

かっこいい。ぼくが？ えっ、どこが？

思いがけない言葉にぼうつとしてしていると、肩にこつんとお母さんの体がふれた。

「あたしたちも帰ろ。」

「うん。」

夕日に背中を押されながら、いつもの通学路を歩いていく。細長くのびた影を、ぼくは目で追う。

長いほうの影がお母さん。お母さんを追いこすのは、まだ半分、先かもしれない。ぼくはまだ子供なんだと、そんなあたり前のことを実感する。

^⑪「やっぱり、残念だったな。」

ぼつりとぼくはつぶやいた。

「なにが？」

「田村とお母さん。今日はさ、二人の再出発の日になるはずだったんだ。」

お母さんに、香帆のことを話して聞かせた。

「お父さんに見せたいって、言ってたんだ。お母さんといっしょに走ってるよ。」

暮れていく夕焼けの空を見あげた。

やっぱり、香帆にはお母さんと走ってほしかった。二人でスタートラインに立つ姿を、空から見守ってほしかった。

「お母さんは、違うと思うな。」

ゆっくり首をふりながら、お母さんは否定した。

「香帆ちゃんのお父さん、きつとよろこんでると思うよ。香帆ちゃんにやさしい友達がいて、お母さんかわりに、いっしょに走ってくれる人がいること。二人だけがんばらなくてもいいんだよって、まわりの人に助けてもらっていいんだよって、お父さんは言ってると思うな。それがわかったから、香帆ちゃんもうれしくて泣いてたんじゃなくかな。」

流れる涙を、ぬぐいもせずに泣いていた香帆。最後は泣き笑いで涙をすすっていた。

「正真正銘、今日は香帆ちゃんとお母さんの、再出発の日だったと思うよ。」

「ほんとにそう思う？」

「思う！」

お母さんはきつぱりと言った。

「ねえ、今まで考えたことなかったけど、二人三脚競走^{にさんきやく}って楽しそうだね。来年は、お母さんが走っちゃおうかな？」

お母さんはぼくの体に腕^{うで}をまわしてぎゅっと引きよせた。

「ぜったい、やだ！」

「なんでよ。」

むっとした声でお母さんが言う。

ぼくはお母さんの腕からぬけ出した。

「来年も、おじいちゃんと走るって約束したんだ。」

(葉山^{はやま}エミ『ベランダに手をふって』より)

※(注) 妊婦^{にんぶ}さんである莉子^{りこ}おばさん

——— 樹^{いっま}おじさん」の妻。

問一 ——線①「ぼくは香帆かほのお母さんを見たことはないけど、香帆といっしょに正門から入ってくる人の波を目で追った。」とありますが、このときの香帆の気持ちはどのようなものであったと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア お母さんが運動会を忘れてしまったことに関わりする気持ち。
- イ お母さんと運動会に出られることに胸がわくわくする気持ち。
- ウ お母さんに一刻も早くきてもらいたいと不安でいたたまれない気持ち。
- エ お母さんは必ず間に合うようにきてくれると信じて疑わない気持ち。

問二 ——線②「息子むすこと孫の初共演」とありますが、ここでの「息子」と「孫」とはそれぞれだれのことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「息子」は樹おじさん、「孫」は「ぼく」のこと。
- イ 「息子」は樹おじさん、「孫」は香帆のこと。
- ウ 「息子」は「ぼく」、「孫」は樹おじさんのこと。
- エ 「息子」は「ぼく」、「孫」は香帆のこと。

問三 ——線③「やっぱ緊張きんちょうするな。でも心配するな。」とありますが、このように樹おじさんから言われたときの「ぼく」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自分と樹おじさんが練習したとおりにうまく走れるかどうかよりも、菜摘なづみが香帆をつれてどこに行ってしまったのかを気にしている。
- イ 自分と樹おじさんが二人三脚競走ににんさんきやくで練習の成果を出せるかどうかよりも、香帆がお母さんと合流することができたかどうかを心配している。
- ウ 自分と樹おじさんが練習したとおりにうまく走ることよりも、香帆がクラスの人々と合流できることをいっている。
- エ 自分と樹おじさんが二人三脚競走で良い結果を出すことよりも、香帆が実力を発揮して一番になることを願っている。

問四 文中の□ A・Bにあてはまる言葉として適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ア ぐっと
- イ かつと
- ウ はつと
- エ すつと

問五 ——線④「さっきまで不安でゆれていた瞳が、今は怒りでゆれている。」とありますが、「不安」が「怒り」に変わったのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア まわりの友達が一方的に話すので、お母さんを待ちつづける思いを察してくれていないように感じられたから。

イ まわりの友達の話を聞いたことで、お母さんが自分といっしょに走りたくないのではないかと感じられたから。

ウ まわりの友達が騒ぎ立てはじめたので、お母さんがこないことをからかわれているように感じられたから。

エ まわりの友達の言葉を聞いたことで、お母さんが最初からできない約束をしていたように感じられたから。

問六 ——線⑤「ぼくたちのあいだに、あきらめの空気がただよう。」とありますが、「あきらめの空気がただよう」とは、どのような様子を表していますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 香帆とお母さんの仲が悪くなってしまうのではないかと、みんなが心配している様子。

イ 香帆が参加しないと赤組は優勝できないだろうと、みんながやる気を失っている様子。

ウ 香帆は二人三脚競走に参加できないだろうと、みんなが落ちこんでいる様子。

エ 香帆のせいで運動会を楽しめなくなったと、みんなが不満に思っている様子。

問七 ——線⑥「田村はうちのおじさんと走って。」とありますが、「ぼく」がどのように言ったのは「ぼく」にどのような思いがあったからですか。その思いが書かれている一文を文中からぬき出し、その初めの七字を答えなさい。

問八 ——線⑦「香帆の顔はまだ晴れない。」とありますが、このときの香帆の気持ちを説明したものと最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア お母さんと二人三脚競走に出ることをあきらめきれいでないので、樹おじさんと走ることを不満に思っている。

イ 自分の保護者ではない樹おじさんと走ってしまうと、提案した「ぼく」があとで先生にしかられてしまうのではないかと気にしている。

ウ 自分が樹おじさんと走ってしまうと、「ぼく」が二人三脚競走に出られなくなってしまうのではないかと心配している。

エ 今までお母さんと練習してきたので、一度もいっしょに走ったことのない樹おじさんと出場することを不安に思っている。

問九 文中の□Cにあてはまる一文として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア おじいちゃんとゴールする。
- イ おじいちゃんと一番になる。
- ウ 香帆が二人三脚競走に出られた。
- エ 香帆が二人三脚競走で一番になる。

問十 ———線⑧「香帆がちゃんと走ってる。」とありますが、「ちゃんと走ってる」とはどういうことだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 香帆が樹おじさんの腕をしっかりとつかんで、お母さんよりも速い樹おじさんのペースに合わせて走っているということ。
- イ 香帆が樹おじさんと初めていっしょに走るにも関わらず、本当の家族のようにお互いを信頼し合って競技に参加しているということ。
- ウ 香帆がお母さんとは二人三脚競走に参加することができなくても、「ぼく」たちといっしょに競技に参加できているということ。
- エ 香帆がいっしょに練習してきたお母さんとはなく樹おじさんと出場したことで、意外にも優勝をねえそうだということ。

問十一 ———線⑨「うれしいの。」とありますが、香帆は何がうれしかったのですか。解答らん「こと。」につながるように、文中の言葉を使って五十字以内で説明しなさい。

問十二 ———線⑩「今日の輝、かっこよかったぞ。」とありますが、樹おじさんは「輝」のどのようなところを「かっこよかった」と言っていると考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 樹おじさんと走ることを香帆に提案したり、樹おじさんに香帆のペースで走るようアドバイスをしたりと、自分のことよりも香帆のことを考えて臨機応変に判断し行動したところ。
- イ 樹おじさんと走るよう香帆へすすめたことで、香帆を二人三脚競走に出られるようにしただけでなく、「ぼく」といっしょに走りがっていたおじいちゃんの願いもかなえたところ。
- ウ 香帆と樹おじさんはいっしょに走らせることで、困ったときはお母さんだけではなくまわりの人も助けてくれることに気づかせ、人を信じる気持ちを取りもどさせたところ。
- エ 香帆が樹おじさんと走りやすくなるように樹おじさんへアドバイスをするなど、二人三脚競走が始まる直前まで香帆を助けながら、自分自身も競走で良い結果を残したところ。

問十三 —— 線⑪「やっぱり、残念だったな。」とありますが、ぼくは何が「残念」だったのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 二人三脚競走で香帆が**お母さん**と一番でゴールする姿を、亡くなった香帆のお父さんに見せられなかったこと。

イ 二人三脚競走で香帆が笑顔でスタートラインに立つ姿を、亡くなった香帆のお父さんに見せられなかったこと。

ウ 二人三脚競走で香帆が**お母さん**といっしょに走っている姿を、亡くなった香帆のお父さんに見せられなかったこと。

エ 二人三脚競走で香帆が練習した成果を十分に発揮する姿を、亡くなった香帆のお父さんに見せられなかったこと。

問十四 —— 線⑫「**正真正銘**、今日は香帆ちゃんとお母さんの、再出発の日だったと思うよ。」とありますが、

「ぼく」のお母さんが「今日は香帆ちゃんとお母さんの、再出発の日だった」と考えるのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 二人三脚競走を通じて、香帆とお母さんがだれかに頼らなくても二人だけで生きていける姿をお父さんに見せることができたと考えているから。

イ 二人三脚競走を通じて、香帆とお母さんがまわりの人のやさしさに助けられながら生きている姿をお父さんに見せることができたと考えているから。

ウ 二人三脚競走を通じて、香帆がまわりの友達のやさしさによって心を開いていく姿をお父さんに見せることができたと考えているから。

エ 二人三脚競走を通じて、香帆がお母さんに頼らなくても一人**ひとりで**困難を乗り越えられる姿をお父さんに見せることができたと考えているから。

問十五 この物語の中では、「二人三脚競走」にどのような意味を持たせていると考えられますか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を五字以内で考えて答えなさい。

二人三脚競走は二人で協力しないと前に進むことのできない特徴をもった競技である。
その特徴に、人と人との□を重ね合わせている。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① この海はユウエイが禁止されている。
- ② この作品にはネダンをつけられない。
- ③ ボウハン訓練に参加する。
- ④ 交通違反にキインする事故をふせぐ。
- ⑤ 新しい時代のマク開きを実感する。

問二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 読書はわたしにとって至上の喜びだ。
- ② 危険な区域を立ち入り禁止にする。
- ③ 英語の勉強に専念する。
- ④ 有名な絵を模写する。
- ⑤ 不良品を取り除く。

問三 次の①～④の□にあてはまる一字の漢数字をそれぞれ答えなさい。

- ① □心不乱に勉強したので合格することができた。
- ② 三寒□温の季節となりましたが、いかがお過ごしですか。
- ③ 目標に向けて□里の道も一歩からの気持ちで努力する。
- ④ 彼が突飛な発言をしたのでだれも□の句がつけなかった。

問四 次の①～③の三字熟語と組み立てが同じものを後のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| ① 雪月花 | イ 人気者 | ウ 大中小 | エ 真夏日 |
| ア 目分量 | イ 初対面 | ウ 先入観 | エ 百人力 |
| ② 初対面 | イ 先入観 | ウ 松竹梅 | エ 再放送 |
| ア 先入観 | イ 百人力 | ウ 外出中 | エ 中学校 |
| ③ 外出中 | イ 問題外 | ウ 高性能 | エ 不可能 |
| ア 中学校 | イ 問題外 | ウ 高性能 | エ 不可能 |

問五 次の①～③の言葉のグループの中から意味の似ている言葉をそれぞれ二つずつ選び、その記号を答えなさい。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ① | ア | 同意 | イ | 同調 | ウ | 賛美 | エ | 賛成 | オ | 調和 |
| ② | ア | 関連 | イ | 興味 | ウ | 関心 | エ | 興奮 | オ | 感心 |
| ③ | ア | 自律 | イ | 自信 | ウ | 自重 | エ | 自覚 | オ | 自負 |

